

地域研 フォーラム Forum



vol.11 2010 Aug:

vol. 11 2010 Aug.

地域研フォーラム

勝連城跡



まえがき

特別研究員寄稿

- 熊谷 フサ子 豊島岡女子学園にみる「運針」事情
上原 孝三 宮古島西原のシートゥガンニガイ（生徒神願い）
奥田 夏樹 熟議によるコミュニティソリューションで
持続可能なまちづくり
-

土曜教養講座

- 【報告】第461回
第462回 沖縄戦は終わらない Part4
広島・長崎・沖縄 共通の記憶継承
-

所内雑記

まえがき

珍しく山梨に泊まる機会がありました。ノンカーボ総合医療研究会という医療ワークショップです。これは沖大地域研の誇る共同研究グループの一つで、珍しく医師が中心。その一人がアールベータで有名なハタイクリニックの西脇院長です。西脇先生のワークショップは日曜日の午後に終わり。夕方から河口湖でイルカのコンサートがある、とのことで調べたところ会場はすぐ近く。そこで皆様にお別れの挨拶をする時に言った言葉が適切ではなかったのです。ワークショップに参加メンバーに送ったメールを下記に紹介します。

・ ・ あの後、イルカのショーへ行く、と言ったので皆さん勘違いされたようです。ドルフィンのことではなく、「なごり雪」で有名な歌手・イルカのコンサートが河口湖のステラ・シアターで開かれました。それを見に行きました。彼女も60歳位のはずですが、オカッパ頭でつなぎのジーンズ。どう見ても20代のままです。冬馬くんという息子（同じステージで歌った）がいて孫もいて、世間的に言えばおばあちゃん世代。

押尾コータローというギターの名手や山本潤子も登場。「中央フリーウェイ」や「卒業写真」を聞いて、気分は30年くらい昔にタイムスリップ。途中で雷が鳴ってまるで映画の1シーンのようでした。私も実は文化放送時代にハイファイセットやイルカの番組も担当したことがあり、ライブにも時々つきあいました。

圧巻だったのは「なごり雪」を歌っている途中、霧が晴れ、背景に巨大な富士山が姿を現したこと。良いね良いねヨイネクライネナハトムジークですよまったく。

次の日は法政大学やら出版社やら公的な仕事の後、吉祥寺に昔の仲間と集まって、飲んで騒いでヒーリングをして翌朝、那覇へ。今回の出張は、重要な打合せがパラ入り、真中が山梨で楽しいセミナーを経験しました。皆様ありがとうございます。

なおイルカのコンサートはIUCN（国際自然保護連合）主催。沖大地域研は沖縄で唯一のIUCN加盟団体です。IUCN親善大使のイルカさんからコンサートに招待されました。ちょうど山梨行きとスケジュールが合ったので参加しました。河口湖での仕事を終えた後、月曜日には法政大学で戦略GPの「最高機密会議」。ここで日本の今後をどうするか、小沢とアメリカの手打ちを早めに行った方が良いのではないか・・・などの話題は出ませんでした。そうだブータン首相からのメッセージが届いていますのでご紹介しましょう。

7月21日付でブータン首相からのメッセージが届きました。会員の皆様にお伝えします。

6月26日（土）に沖縄大学で「ブータンから沖縄の幸福を考える」を開催しました。その時には間に合いませんでしたが、ここでご報告いたします。（この講演の様子は8月8日の6時～8時、沖縄ケーブルネットワークにて放映）

ブータン首相は4月来日の際の外国人記者クラブでの会見で次のように述べています。

「2020年からは我々は一切の国際援助を受けないこととする。」

国からの援助を貰うことのみならずどこかの地域に聞かせてやりたい言葉です。以下、長くなりますがブータンからの公文書の翻訳です。

2010年7月21日

ブータン王国首相から沖縄大学へのメッセージ

G・N・Hとブータンに関する研究を、沖縄大学で緒方教授らがスタートしたことを知り、たいへんうれしく思います。このことはブータン国民にとって大きな誇りと喜びであり、また、我々が沖縄の人びととより強い結びつきを作り上げるのに役立つものでしょう。

ヒマラヤ地域の小さくて陸地で囲まれた国家である我々は、島嶼圏沖縄の人びとから多くのことを学び、共有できると私は確信します。実際、以前に日本の大学がブータンで行ったある研究は、私たちが多くの共通性をもつことを示しています。例えば芸術、音楽や、伝統・文化の保護に対する熱意、そして平和を愛する心など。これらのすべてが、沖縄とブータンが模範的な関係性を構築するための研究基盤を提供するはずで

また、長期にわたってG・N・Hを主唱してきた私は、緒方教授と沖縄大学が主導するG・N・H研究が格別の意図に基づくものと確信します。私たちの惑星は、再生し生命を維持する許容量を超えて、思慮なく汚染され、不当に開発され続けています。幸せは物質的豊かさで決まるという誤った考えに駆り立てられています。私たちは、将来の世代が生きていくための大切な資源を奪いつつあるのです。

このことは、私たちお互いがそれぞれのやり方で、政府や政治家、企業に対して従来の成長、開発、繁栄の概念を再考するように促す、世界的な自覚をもつことを迫っています。そのようなとき、新しい発想や考え方を育て、パラダイムの転換を図る場として、大学のキャンパスほど適切な場所はないでしょう。沖縄大学は、こうした優れた価値ある意図のために道を敷こうとしているのです。

ブータン国民と私は、緒方教授と彼の友人および沖縄大学の貴い試みに対して心からエールを送ります。

ジグメ・ティンレー Jigme Y. Thinley



PRIME MINISTER

དཔལ་ལྷན་འབྲུག་གཞུང་།
Royal Government of Bhutan

21 July, 2010.

**Message from the Hon'ble Prime Minister, Kingdom of Bhutan, to
Okinawa University.**

I am most delighted to know that Professor Ogata and friends are introducing a course on GNH and the Kingdom of Bhutan at the esteemed Okinawa University. This is a source of immense pride and joy for the Bhutanese people, one that will certainly help us forge stronger relations with the people of Okinawa.

Small and land-locked as we are in the Himalayas, I am convinced there is so much we can share with and learn from the people of the island of Okinawa. In fact, a study done in Bhutan earlier by some Japanese universities show we have many similarities – such as our interest in art, music, zest to preserve traditions and culture, and love of peace – all of which should serve as sturdy foundations to building an exemplary relationship.

As a life-long advocate of Gross National Happiness (GNH), I am also convinced that the initiative of Professor Ogata and Okinawa University to introduce a GNH course is a cause extraordinaire. Our planet is being mindlessly polluted and exploited, way beyond its capacity to regenerate and sustain life, driven by the fallacious notion that happiness hinges on material possessions. We are robbing our future generations of any means for survival!

It is thus pressing that each one of us, in our own way, builds a worldwide consciousness that urges our governments, politicians and business to rethink the conventional notions of growth, development and wellbeing. And what better place than the campuses of colleges and universities, the incubators of new ideas and thinking, to push for such a paradigm shift. Okinawa University is paving the way for this most worthy cause.

The people of Bhutan and I wish Professor Ogata, his friends and Okinawa University, all the best for their noble endeavour.



(Jigmi Y. Thinley)

2010年7月
沖縄大学地域研究所
所長 緒方 修

豊島岡女子学園にみる「運針」事情

熊谷 フサ子
沖縄大学地域研究所特別研究員

今春2月、東京の女子校で毎朝運針を実施しているとの情報があった。早速、東京都に在る私立・豊島岡女子学園のHPを開いて確認した。学園生活・日課の一覧が表記され、8:15～8:20「糸を通した針」の絵文字と運針と明記されている。コメントに「毎朝8時15分の合図とともに、全校一斉に静寂の 때가 きます。各自が用意した1疋の白布に赤糸をひたすら通す「運針」です。一日の始まりを心静かに迎える「5分間の禅」ともいえるこの行は、集中力を養う心の鍛錬の時間です。6年間もしくは3年間にわたる毎朝の運針の継続は基礎の大切さや積み重ねることの偉大さを、身をもって実感させてくれると思います。」と運針することへの意義が付されている。

6月に入り、運針実施現状を知るべく学園へ直接電話、了解のうれしい返事を頂戴した。

6月8日・夕刻東京へ出向き、翌9日、早朝6時半過ぎ宿をでて、飯田橋駅から地下鉄有楽町線に乗り、池袋駅で下車。行く先の私立・豊島岡女子学園に7時15分頃着。学園・生徒達の登校風景を見学させてもらった。生徒は制服を着用、髷スカートが適度の丈であるのになぜかホッとしていた。巷で見かける丈の短いスカート丈の生徒は見当たらなかったからだ。生徒達の持ち物は学園指定らしき紺のバッグに個人用バッグの2つを重たそうに持ち、足早に学園内に吸い込まれるように登校、守衛さんが「おはようございます」と、迎えていた。学園との約束の時間前になり門を入れて受付へ伺う。小林博子教頭先生が暖かく歓迎、学園の概要等を拝聴。ホームルームのチャイムで小林先生、家庭科の長谷川綾先生のご案内で中学1年生・2年生教室へ移動して、「ホームルーム・運針」の教室の様子を見学させていただいた。1年生は6クラス・3階の廊下を挟んで左右に3クラスずつで1クラス員は42～43人。1年生の教室の隣に2年生の教室が続く。教室内は、かなりコンパクトな構成である。



1年生の運針準備中 (ホームルーム)



2年生の運針・手の動き

ホームルームの時間、既に生徒達の机の上には運針の準備ができていた。8:15、学園内にチャイムが鳴り響く、生徒達が用意した運針用布の白布・晒し木綿で運針を一齐に始めた。入学して未だ2ヶ月を過ぎたばかりの1年生、ほとんどの生徒の手が上手に動いている。実際・衣裳等の布地での運針とは左・右の動きのバランスに多少の違いはあるが、利き手の人差し指、親指の動きは確かに動いている。続いて2年生の運針の様子を見学、クラス全員が懸命に運針をひたすら行う。間もなく5分間の運針・終了のチャイムが鳴り、生徒達は一齐に「針と赤糸」を手早く片付けにはいり、運針用布を整理した。小林先生、整理している針箱を指して「ご覧下さい、片付けも生徒達自ら工夫して先輩から後輩達へつなげているのですよ」と。感動の余韻を残して先生方と校門で写真に収まり学園を後にした。



豊島岡女子学園門にて

学園の歴史

豊島岡女子学園の歴史は1892年5月1日、河村常（加賀藩前田家の藩士夫人）が牛込区下宮比町に女子裁縫専門学校として設立した。1898年、校舎を牛込区新小川町に移転。1904年に東京家政女学校と改称。1923年、牛込高等女学校を併設する。東京大空襲で校舎が全焼。1948年、現在の豊島区に移転して「豊島岡女子学園」と校名変更、学校法人・中学校・高等学校の一貫、普通科 3学期制、全日制課程として現在に至っている。

卒業生の進学・進路状況は、2010年、超難関の東大への17名を含む国公立大学へ126名が合格、私大・早稲田大学へは、161名（現役136名）が合格する等、私大・理系（特に医学系）への進学率も高率を記している。

何故運針か

豊島岡女子学園での運針は、1948年・昭和23年御典医であった二木謙三校長（佐竹藩の御典医をしていた家系）の時から始められた。学科始業前に指先・手先を動かすことは、医学的には「脳のウォーミングアップ」になるとのこと。では、何故運針か、その意義を同学園では次の4つをキーワードにしている。一つに「努力の積み重ねの大切さを知る」、二つに「基礎の大切さを知る」、三つに「無心になる」、四つに「特技を持つ」ことを掲げている。当初は全く出来ない運針も日々の積み重ねで出来るようになり、努力の大切さの体得、無心に手を動かすことにより集中力を高め、他校にない運針を「特技」として捉えている。女子校として、理系への高進学率等は、学科等のきめ細かなカリキュラム、学習環境を整えての成果であろうと推察される。「運針」もその一助としての脳の活性化・ウォーミングアップであった。

運針のメカニズム

「運針」は文字どおり針を運ぶ仕草。指貫を用いて、横方向に縫い進める仕草は、

他国にない日本独特の縫いの技法。私は運針の技法を「自転車乗り」に例える。針が自転車ということになる。自転車に乗ったまま静止していると自転車はフラフラの状態、走ることによって安定を保つことができる。運針も同様に利き手の指貫に針の頭を停めて針を持つ、縫いの体制のままでは針が安定しない、縫い進めることで針が安定する。利き手の人差し指と親指で針先（縫い目大）を持ち、布地目を左右の親指で引き、針を持たない親指が針目の案内役になる。左右の指は常に引き合い、親指と人差し指を交互に動かす、縫い目大きさに応じて針を持つ指が調整・「きれいに早く」が可能になる。針を持った状態を側面から見た場合、針と人差し指、親指がほぼ二等辺三角形になる。

運針の縫い訓練の時期が10代と言われている。日々の「運針練習」練習が技術・技能に繋がる。

指先運動と脳の働き

豊島岡女子学園の運針への取り組みや同学園の資料に「脳のウォーミングアップ」の文字、理系への高進学率等に促されて「脳」に関する参考書『脳の話』（時実利彦著）・『脳の方程式、いち・たす・いち』（中田力著）・『わがまな脳』（澤田俊之著）・『脳と運動』（丹治順著・）『脳のイメージング』柴崎浩・米倉義晴著『脳を鍛える』立花 隆『脳が語る身体』（養老孟司著）を素読みした。（読解できない部分はジャンプ）

脳の構造は、脳は硬膜、クモ膜、柔膜の脳膜・三重層。柔膜は脳表面、その外側のクモ膜との隙間に髄液で満たされ外からの衝撃が脳へひびかないようになっている。クモ膜の外には硬膜で包まれている等、大切な宝物を何重にも包まれた状態。重さは、生まれたばかりの赤子：370g^ラ～400g^ラで体重の10%、大人の脳は体重の2.2%、脳の発達には身体の発達に比べて早く、生後六ヶ月で生まれた時の2倍、7・8才で大人の重さの90%になる。男子は20才、女子は18・9才で完成する。細胞の数は、140億あり、成長に連れて沢山の樹状突起を伸ばし脳細胞と絡み合っ神経線維に髄鞘が出来て初めて脳細胞が働き始める。

「日々の体験は、脳のどこかに痕跡として残り、痕跡は反復によって強められる、これを記録といい、記録されたものは必要に応じて再現し、想起することが出来る。この全体の仕組みを記録といい、反復によって記録を強めることを学習という。この全体の仕組みを記憶、記録されたものはある期間保持されるが、そのうちに忘却する。（『脳の話』173P）

脳力は知性、知性の一つではなく複数である。言語的知性、絵画的知性、空間的知性、論理的知性、音楽的知性、身体運動的知性、感情的知性。これらの臨界期の期間はだいたい生後8～12才であり、幼児期に脳内システムの臨界期は集中しているようだ。

私たちの知能や運動能力を含めた能力は結局は脳の力、「脳力」である、と記している。

脳細胞は20才頃を境に減少するが、学習によって大きく変化・増加される。認知症の人がジャグリング（お手玉）を続けたことで解消した例もあるようだ。

豊島岡女子学園の朝、8:15のチャイムの音で聴覚神経を起こし、5分間の制約された時間との戦い、針と糸、針目、左右の指先の運動等々、全て諸神経系が集約して運針が成り立つ。正しく「脳のウォーミングアップ」であろう。

おわりに

豊島岡女子学園の教頭・小林博子先生、家庭科・長谷川綾先生との懇談の中でこんな会話が伺えた。「毎年秋には“全校運針記録会”があり、記録の上位者になると5分間で6疋を縫う生徒もある。」「新入生に上級生が運針を指導するのも伝統」、「文化祭には3人一組で運針競技もあり、職員も参加するが、上位は生徒達である」とのこと。同学園の見えない「魅力」を痛感した、と同時に医学系への進学を選択する傾向にある同学園の生徒達が、「手縫いすること」にこだわる日本の伝統的衣裳や日本文化等への関心度はどうでしょうか、伺う時間はなかった。

我が泊教室で同学園の運針事情を伝えた。その一端、「運針技術を生かして進学する生徒は皆無でしょうかね」、「いや、外科医になって手術の時に運針が役立つかもしれませんよ」。

豊島岡女子学園・卒業生の皆様には、極僅かであっても「運針技術」を生活の中に活用されることを望みたい。それは衣文化の継承に繋がるでありましょうから。

宮古島西原のシートゥガンニガイ（生徒神願い）から

上原 孝三

沖縄尚学高校 教諭

沖縄大学地域研究所特別研究員

高校受験、大学受験前に神や仏に合格祈願を掛ける受験生やその親は多いだろう。受験はいまや人生の通過儀礼になっている。

大晦日に蠹く人々に混じり、あるいは新年の年頭に朝日を浴びながら神社仏閣に詣で、合格を祈願する。極当たり前の正月風景だが、沖縄県の庶民に初詣の風習ができたのは近年のことだ。沖縄の離島の宮古も然りであるが、初詣はヤマトの風習だから行かない、という人も多い。

宮古島では一般的に、アチママ御嶽（あちいまうたき）・赤名宮（あかなぐう。神社ではなく御嶽）・宮古神社等で合格祈願を行う。二つの御嶽はそれぞれ学問の神を祀り、宮古神社は近代に造営されたそれで、宮古歴史上の人物で「産業界の三偉人」を祭神としている。

宮古で一番格が高いとされる漲水御嶽（はりみずうたき）を訪れたことがある。一般的に、御嶽は原則として男子の出入りは禁止。大学1年の頃、何気なく漲水御嶽内に足を踏み入れた途端、ここには一度来たことがあるぞ、と脳裏に閃いた。デジャブ。不意に、母と一緒にだったことも思い起こされた。それは、小学低学年の時点で、妙に暖かい日だったと記憶する。村からわざわざ1時間も歩いて他地域の御嶽にいる不可解さ。不気味さ。少年たちは、御嶽は怖いところだという観念を大人から植え付けられていた。

思案顔をしていた母が意を決したかのように、御嶽内の右側にある小さな祠の前で海に向かい祈願を始めた。何故そのような行為をしているのか分からなかった。ただ、思い詰めたような母の横顔が脳裏に焼き付いている。

そのようなことがあり、後年漲水御嶽でのことを母に問い質した。母はうろ覚えだったが、息子（長男）が高校受験なので合格祈願をしたのではないかと答えた。宮古から沖縄の方角に向かい祈ったのである。長兄はその時分宮古ではなく、沖縄本島にいた。母は、家族と離れて暮らす息子を不憫に思うと同時に、自分にできる精一杯のことをしたのであろう。

長兄は中学二年の夏に沖縄本島・那覇市内の中学に転校したのだった。嫁いだ姉が那覇に在住しており、中学二年の弟を呼び寄せたのである。貧乏な実家の家計状況と弟（達）の将来を慮っての姉の英断だった。辛い農作業から解放されると思った長兄は、渡りに船とばかりにせっせと沖縄に渡った（らしい）。

母の行為は子を思う気持ちから発露したものだが、神社仏閣ではなく御嶽で合格祈願をしたことが肝要であることをここで確認しておきたい。宮古にも神社仏閣は数少ないが存在する。村落の神役を経験した母の発想の基盤には、神への祈願は御

嶽で為すものとの思いがあったのだろう。

宮古の各地には御嶽が多数存在し、1000は下らないだろうといわれている（『平良市史』第8巻御嶽編では964の御嶽が確認されているが、調査漏れの御嶽がある）。御嶽の多さは宮古文化の特長と言われている。

御嶽ではないが、宮古の小・中・高校の敷地内にはたいてい拝所がある。これは宮古の学校の有する特長の一つだろう。拝所は、単に石囲いであったり、コンクリートを平に打ちならしてある場所、あるいは小さな祠があったりしたり形態的には様々である。

設置の目的は、学問成就、生徒の健康祈願が主であるが、誰が・いつ敷地内に拝所を設定したのかよくわからないのが実情である。拝所設置は、教職員つまり学校側と地域間での合意の基である。設置の目的が学問成就、生徒の健康祈願であるので、教職員側は恐らく積極的に反対する理由がなかったのではないかと推察できる。つまり、拝所設置をめぐる宗教・信仰上のトラブルはなかったと思われるのである。少なくとも、公的に宗教上のクレームがあったとは仄間にして知らない。

だが、どうして両者にとって不都合なくすんなり許容されるのであろうか、またその背景には何があるのだろうか。恐らく、御嶽の存在や宮古の民俗宗教が大きく影響しているものと思われる。

宮古在の4高校は全て公立であり、官公庁の存在する旧平良市内に3校、伊良部島に1校ある。伊良部高校は全日制の高校で普通科が主体（伊良部高校は創立15年。創立以前は伊良部島の中学生は宮古島まで渡り受験していた）。私立の高校そして大学・専門学校は宮古にはない。従って、地元での受験は高校のみとなる。交通手段が発達してない40年ほど前は、遠隔地および離島の中学3年生にとって、映画館・飲食店などがある平良市内は異空間の別世界だった。

宮古の高校受験風景は一風変わっている。池間大橋が架橋されない前、池間中の受験生は引率の先生と漲水港近くの旅館に数日宿泊する。受験前に全員で漲水御嶽を詣で、合格を祈願する。島を出立する前にも、校内の拝所と御嶽で祈願をした。熱心な親達は受験前日に宮古島に渡り、その足でアチママ御嶽に向かう。民間の霊的職能者であるムヌシィー（物知り。ニガインマ・願い母ともいう。沖縄地方でいうユタに相当する）に依頼し共に合格祈願を行う。

現在でも、北中学では高校受験の願書を提出する朝、教員の主導によって、校内の拝所に受験生全員を集め合格祈願を行う。PTA役員・一般の親も時間に余裕のある人は参加する。現在、宮古の中学ではだいたい北中学と同じような行為をするようである。

宮古島市の平良中学は伝統を誇り、宮古で一番生徒数の多い中学校である。平良中の事例は以下の通りである（2010年1月24日調査 話者・砂川教頭先生）。

拝所 元々は、学校東側の校舎の裏にあったが、4年ほど前に現在の東門付近に移動した。その理由は、拝所のガジュマル木が成長し大きくなり、拝所のブロックを破壊しだしたからであった。ガジュマルの根本の部分にブロッ

クがあり、拝所の痕跡が確認される。拝所の作り方から、向き（イビ）は東方と思われる。

現在の拝所は、コンクリート造りの小さな祠であり、向きは北。祠の東側は木立であるが、西側には遮蔽物は何もないので拝所を望める。祠の中には石を奉納してあり、四角（立方体）の香炉（数個穴が空いている）のようなものがある。祈願者はそれの上にお金を置く。祠の前には一畳分のスペースがある。

来年度、校舎新築の為、東門付近の通路を拡大するため、現在の祠も移動する可能性もあるという。

時 推薦・一般入試の願書提出日の朝。

所 学校の拝所

呼びかけ者と出席者 呼びかけは3学年主任と担任。平成21年度の推薦入試の願書出願者とその父兄。高校の推薦入試・一般入試の願書を出す際に、出願者およびその父母・保護者が参加するが、保護者の出席は自由。父母・保護者の参加人数はその年により多寡がある。

祈願方法 祠の前のスペースの都合上、生徒は数人一組になり合掌する。

供物 酒（泡盛）・塩・線香は学校が供出。テンプラ・お菓子などは父兄が供出。平成21年度の推薦入試の願書提出日の供物のテンプラは、教職員全員と出願者全員に配布された。

平良中学は宮古で生徒数が一番多い学校であり、3学年は4クラスある。推薦入試に臨む生徒は約50人だった。受験生・保護者・学校には大きな行事となった。神への祈願という形であるが、そこには神事を司るツカサや神役は不在である。

受験生を抱えた家族の受験当日朝の宮古での一般的な風景。母親はウカマヌカン（竈の神。火の神）に高校合格と家族の一日の平穏無事を祈る。出発前には親子共々仏壇に手を合わせる（仏壇が家がない場合、受験の数日前に父親の実家・本家に行く）。その後、親子は受験校の拝所へ行き、合格祈願をする。塩・米・酒を供え祈願する親もいる。祈願後、親は家に帰るもよし。そのまま学校で待機するもよし。要は受験生である子供と昼食を共にすること、それが大事。

昼食を家族・親戚と共に摂る受験生。親は朝から昼食場所を確保する。運動場やチョットしたスペースで弁当を広げるのは、傍から見るとまるでピクニックである。近年では弁当の中に必ずイチゴを入れるようだ。一番合格の意味とのこと。イチゴは一合との掛詞。なかなか洒落ている。一見のんびりとしたこの昼食光景は日本全国のなかでも珍現象としてテレビでも紹介された。

心配で子供を温かく励ます親、家族との団欒でリラックスする受験生。この光景は現代宮古の風物誌となっており、当地のマスコミも好意的に取り扱っている。高校側も受験生の親達を学校から追い出すことはまずしないし、親たちは受験生へ激励に駆けつけた中学教師とのコミュニケーションを楽しんでいる。親子で摂る昼食を伝統的な習慣として高校側も奨励している。

受験日は、農家にとって重要なサトウキビの収穫時期とも重なり、弁当の時間に慌てて駆けつける親もいる。だからといって、決して過保護ではない。そのような観念は親子ともども持っていない。むしろそのような生活を楽しんでいるといったほうが妥当ではないかと思われる。

高校校長経験者二人にインタビューの中で、弁当についての学校へのクレームはないのかと聞いた。つまり、親子で弁当を食べることができない(仕事などの理由で、親が弁当を持っていけない)ので、子供がかawaiiそうだから、そのような習慣・風習は廃止すべきだとのクレームはないのかと聞いたが、一度もないとのことだった。

親へのインタビューでも、クレームの件について見解を求めてみた。理屈では考えられるが、クレームそれ自体は聞いたことないと返答だった。むしろ、自分が受験時に親にやってもらったことを自分の子に行って何がいけないのか、という意識が強い。私たちが悪いことをしているのですか、何か文句があるのですか、なんだこのヤロウ的な目線で迫ってくるのでタジタジした。威風(異風)堂々だ。

校長経験者曰く。このような状況の中、校長権限でもって、仮に親子で弁当を食べることを禁止したら、その校長は様々な非難を受けることは、火を見るより明らかである、と。

一体いつ頃から親子で弁当を食べる風習が醸成・形成されたのかよく分からないが、そう昔のことではないだろう。聞き取り調査では、いまから遡ること約50年前のようだが詳細については不明。記録に残ってなく、記憶も人によりまちまちで曖昧だからである。

その問題はとりあえず措くにしても、興味深いことに、学校の拝所は時には校長(教員)の要請で造られることもあった。西辺中学がその例である。

西辺中学は宮古島市の西原にある公立の学校。元来西辺小学との併置校であったが、20年前に分離した。分離で問題が生じた。中学内の敷地に拝所がないことが判明したのである。そこで、中学校側の要請で西辺中学の敷地内に新たに拝所を設けた。地元西原の人々に異論はなく、むしろ喜んで協力した。

併置校であった際は同一の敷地内だったので祈願は一カ所で済んだが、分離してからは小学校での祈願後に中学校でも行うようになった歴史的経緯がある。

拝所を新たに設置する場合にはムヌシー(ユタ)を頼み、土地鎮め、工事の安全祈願を行う。学校プールを設営する際も同様。このような現象は沖縄では一般的なことだ。

西辺小学校は昨年拝所を移動した。移動する、しない、その可否をめぐり字内で様々な議論がなされたようだが、結局移動し新たに小さな祠を建てた。移動前に元の拝所で、村の神役集団・ハナヌマ(上の母)が、移動する旨とその許可の祈願を行い、更に移動予定地でも祈願を行った。起工式、竣工式も行い、新たに祠(拝所)を造ったということで、ハナヌマとナナムイヌマ(七杜の母)の祭祀集団が祈願を行い、落成祝いもした。

しかし、その前には厄介な問題が生じた。工事の受注をだれに依頼するか、とい

うことである。一般的に、大工や左官屋は聖地や拝所などの工事にはなるべく関わりたいくない、と心情的には思っている。何故なら工事期間中はいうまでもなく、工事終了後でも「神」からのシラシ（知らせ）があって不都合が生じた場合、必ず工事責任者は形式上ウーンマから呼び出される。従って、日常的な仕事ができなくなるから拝所の工事はなるべく避けたいのである。

土地整備事業でも御嶽などの聖地に手を触れることはタブーである。このような事例は宮古のみならず、沖縄中いたるところにある。

学校の拝所は御嶽ではないが、御嶽に準ずる性格を有していると考えて良いだろう。ここで、西原の学校での祭祀儀礼の具体的な事例を紹介したい。学校での祭祀儀礼は、年3回ある。二回のシートウガンニガイ（生徒神願い）とガッコーヌヤシキダミ（学校の屋敷為め）は、村落レベルの祭祀として位置づけられていて、いまなお機能している。かつては宮古各地の学校で祈願が行われていたが、現在は各字の神役が不在で、祈願が行なわれない事が多い。そのような状況のなか西原のような事例は宮古で特殊である。無論、学校での祈願は学校が成立してから後のことであり、近代に起源を発す。

旧暦6月頃に行われるガッコーヌヤシキダミニガイ（学校の屋敷の為の願い）は、学校の土地鎮めと生徒・学校教職員の安全祈願健康祈願を目的とする。シートウガンニガイ（生徒神願い）は旧暦5月頃と旧暦11月の二回に亘って行われる。以下、シートウガンニガイ（生徒神願い）概略を示す。5月と11月の祈願形態はほとんど同じ。祈願目的が異なるだけである。

西原のシートウガンニガイ（生徒神願い）

目的	学問成就、生徒・学校職員の健康祈願、合格祈願。
時	旧暦5月の吉日（干支を小学1年生にあわせる） 旧暦11月の吉日（干支を中学の卒業生にあわせる）
場所	ウハルジウタキ（大主御嶽）、ナイカニウタキ（ナイカニ御嶽）、小学校の拝所、中学校の拝所。
祈願者	ナナムイヌンマ（七杜の母）と参加希望者（数え57歳以上の女性） 学校教職員（校長・職員。校長と教職員は学校での祈願とクイチャーに参加）

シートウガンニガイは、午前8時にウハルジウタキ（大主御嶽）に集合し始める。そこでの祈願は1時間ほどで終了し、ナイカニウタキ（ナイカニ御嶽）に車で移動する。ナナムイ以外の参加者は一端家に帰り、鶏卵を持ってナイカニウタキに集合する。祭祀への参加者は一人2個鶏卵を持参する。小学校と中学校の分としてそれぞれ1個ずつ供出し、小学校・中学校用の籠の中に卵をいれる。ナイカニウタキの神庭に卵（鶏卵）の入った籠を置き（置き場所も決まっている）、神前に供える。近年は参加者・祈願者が減少しているため卵を2個以上持参する人が多い（2パッ

ク持参する者もいた)。

大主御嶽を出る頃から雨が降り始め、ナイカニ御嶽からは生憎くの大雨となった。

参加者は大主御嶽より3人減っていたが、それは一般参加者であった。ナナムイヌンマは祭祀が始まったら途中から家に帰ることはまずしない。ナナムイヌンマは祭祀用具と共に常に持参のバッグの中に雨合羽を携帯しているので、それを着用した。

神前に供物を供えることをブンビシ(盆居せ)という。ブンビシには合羽で頭も覆い隠すが、カンニガイ(神願い)の際には頭の部分は外し祈る。雨にずぶ濡れになりながらも祈りは続けられる。

現役のナナムイヌンマ以外の参加者は、雨に濡れないようにとの西原の最高神女ウーンマの配慮があり、マシムイヤー(升盛り屋)で祈願を行った。ウーンマより年長者であっても自分勝手な言動は許されず、祭祀時にはウーンマの指示に従わねばならない。

ナイカニ御嶽の神庭と升盛り屋との距離はほんの5・6メートルの距離だが、升盛り屋から神庭の様子は窺い知れない。そこで、ナナムイの年少者がウーンマの伝令係となり往復することになる。

「オバータ ンマンナカウ カナイー フィーサマティ」(お婆さん達 煙草に火を付けてください)

「オバータ カギニガイユ カナイー フィーサマティ」(お婆さん達 美しい願いをしてください)

雨の中祭祀は粛々と進められていく。雨が降ろうが強風であろうが、一端祭祀儀礼が開始されたならば、いかなる理由があっても途中で省略することはなく、祭祀の延期もありえない。祭祀開始のウーンマとアーグシンマのツティー(煙管)も祭祀終了の酒のお流れも行われた。

台風の中、祭祀儀礼を行ったこともある(雨が降ろうが矢が降ろうが祭りは行うという、西原のナナムイ達の言は決して誇張表現ではない)。

小学校の拝所では、ナナムイ達の祈願後、幼稚園生から順次6年生まで祠の近くで手を合わせる。学年ごとの引率の先生も合掌する。その後、祭場は中学に移動。中学ではインフルエンザ蔓延の為学校閉鎖になったので(2009年のこと)、生徒の参加はなかった。シートウガンニガイは中学校運動場でのクイチャーで午後5時頃に終了した。

さて、ナイカニ御嶽では卵を神前に供える。これには、親鳥に抱えられた卵が孵化・成長するように、子供(生徒)も成長し大空(世の中)に羽ばたいてもらいたいの願意が込められる。一種の祝的行為であるが、親の子を思う気持ち、地域が大切なクガニ・クガナタ(黄金。子供達の比喻表現)に託す気持ちが象徴的に儀礼化されている。このような思いや行為を、幼いと笑うことができるだろうか。むしろ、深く考えるべき事かもしれない。

一日を費やし、子供達の健康と受験合格、そして未来・将来のために御嶽・拝所

で祈る人々の姿は美しい。

たかが受験、されど受験。西原に関する限り、受験生とその親は、①村の御嶽、②出身中学校の拝所、③受験校の拝所、④家の仏壇の四箇所を拝むことになる。

二重三重と神に祈る宮古の人々。人を祈りに駆り立てるものは何だろうか。ある意味では、祈りの心が学校という教育の場にも拝所を生んだのかもしれない。宮古の人々は祈りによって神に守護される。言を変えるならば、人間は神に抱かれているのだろう。宮古の高校受験の風景は正に一種の一大ページェントだ。

熟議によるコミュニティソリューションで持続可能なまちづくり

奥田 夏樹

沖縄大学地域研究所特別研究員

「もう宣車が帰ってくるぞ!」「早く選対に行かなくちゃ」「事務所の鍵が見あたらぬ! どうする!」「じゃあとりあえず留守番してるから、みんな次の予定に行って!」。先日行われたある地方選挙のお手伝いに行った時のひとこまだ。

西表島で貝類の研究を行い、生態学で学位を得た筆者が、なんでいま選挙になど関わるようになったのか、ほとんどの読者は奇異に感じると思う。もちろん、これまでの人生を常に自律的に生きて来られたはずもなく、置かれた環境の中で可能な選択肢から凌いでいく道を模索してきただけなのだが、ライフワークとしては、筆者自身の中ではそれなりに必然性のある展開を経てきたと思っている。

初めて沖縄を訪れたのは1993年の夏。修士・博士論文のフィールドとしてお世話になった西表島も、このころはまだ衛星放送しか入らず、売店ではどこかで勝手に録画したと思われる人気の民放番組のビデオをレンタルしていた。玄関に鍵をかける家は希で、レンタカーも、借り主の名前を書いた紙をフロントガラスに貼り付けてキーも付けっぱなしで港に置いてあって、すぐに乗れるようになっていて「お金はあとで払いに来てね」という状態。不便さもあったが、今は失われてしまった良い面も沢山あったと思う。

研究テーマはアマオブネガイ科という貝類の生息場所に関する適応放散に注目した進化生態学というもので、種によって異なる多様な生息場所の実態を把握するために調査地は、河川上流部からマングローブ湿地、そして海岸潮間帯を含むことになり、結果として多様な水環境で調査を行うことになった。

ところで通い始めたのと同時期から沖縄を中心に日本ではエコツーリズムという観光産業の推進が活発になってきていた。ゼロからの出発なのに、なんで持続可能な利用を担保できるような法的裏付けのある仕組み作りをしないのかが不思議であり、おそらくお金儲けが第一の目的で「エコ」は単なる売り文句だと思っていたのが、20年を経ようとする今、残念ながらその危惧は現実のものとなってしまった。NPO法人高木仁三郎市民科学基金からの助成などによって調査することができた自然体験型エコツーリズムの西表島における数年前の状況は、「日本におけるエコツーリズムの現状と問題点」～西表島におけるフィールド調査から～(『地域研究』No. 3, pp. 83~116)を参照されたい。

学位研究を続ける過程で、このエコツーリズム推進運動の現実や、安易な移住や開発による地域の自然環境や文化、社会構造の劣化を目にして、フィールドの生態学研究者として、座視しては、自分の好きな地方の美しい風景（自然・文化などが構成している）が失われてしまうし、専門家の社会的義務としても、それは許されないのではないかと思うようになった。そして学位を取ったら、基礎科学としての生態学とフィールド屋としての感性をベースしつつも、より学際的かつ社会的なアプローチにより、具体的に問題解決につながる何かをしたいと考えようになったが、具体的にどうすればいいのかは、まだわからなかった。

だが、大学で職を得るのは容易ではないし、大学に在籍する研究者として行政の主催する各種委員会などで発言しても、それが反映されることはまずない。そして御用学者も結構多いことを知っていた。また「職を得るためにまずは研究に専念して、あとで社会活動をすればいい」という人も沢山見てきたが、そう言う人であとで実際に尖った社会活動をしている人は見たことがないので、優秀な人なら両立するのだろうが、そうではない自分は、まずは今、信じることをやるしかないと思った。社会的活動をするには、どのような分野であっても最終的には政治に行き着くだろうとの考えから、政党のスタッフや政策秘書になるのも一つの手ではないかと漠然と思っただけだったが、それだけであった。

またこの頃、地域の自然を守る活動に参加するようになって、地域の人々はもちろん、支援する人々の間でも、様々な異なる思惑があり、「味方」同士であっても合意形成はとても難しいのだということを知った。まして開発行為が地域の発展だと疑わない人々、開発により直接利益を得る人々、そして大多数の無関心な人々と渡り合い、新たな道筋を作っていくためには、それがどんなに正しいとしても、単なる批判だけでは力不足であり、自然や文化を大切にしたい持続可能な社会を実現するためには、地域づくりに関する総合的な提案ができないとダメではないかと強く思うようになった。またその提案は、陽明学徒である河井継之助や大塩平八郎の生き様にかねてより共感していたことから、大学などの外部から傍観者として理想論を語るだけでなく、現場第一の行動主義的なアプローチが必須であると考えた。

そうしたときに振り返ると、この時点で自分に不足しているのは、より広い社会の様々な問題の現場についての知識や、専門家ではない人々に伝える技術であることに気がついた。そこで、伝える技術を身につけ、社会問題の現場にも触れることができるだろうということで、東京にあるインターネットの新聞社に編集者として勤めることにした。もっとも沖縄では納得できる仕事に出会う機会がなかったということもあるし、人間関係に疲れていたことも理由の一つではあったが。

東京では市民から投稿されてくる記事の編集や商店街の紹介などの企画記事の立案・取材・執筆業務などに携わり充実した日々を過ごしつつ、少なくとも3年くらいはじっくりと次を模索しながら力を蓄えたいと思っていたのだが、残念ながら経

営が傾き2年半ほどで転職を迫られる状況になってしまった。

ところがその時期は、すでに半年前から「いつ総選挙か」という政治状況にあり、またかねてより、政治に関心があるなら選挙の実態にも触れたいという希望もあったことから、渡りに船と、縁を頼ってある民主党候補の私設秘書として働くことにした。ここでは、政治・選挙活動全般に関わり、広報誌づくりやPC管理から、街宣車の運転、駅頭活動、ポスター掲示依頼などの個別の訪問活動まで、まさにドブ板を踏む活動に携わることで、地域の実態をより深く知ることができた。8月30日の投開票日まで東京都議会議員選挙を挟んで約7ヶ月間の政治・選挙活動であったから、回数とはもかく期間としては、選挙数回分以上の経験を積めたわけで、大いに勉強になったし、政策担当秘書の資格も取得できたので、次の展開に向け一定の成果は得ることができた。

現在は、研究者としてだけではなく編集者や政治家秘書としての経験を活かしながら、教育、NPO・NGOや政治の場から何かできないかと、試行錯誤を繰り返している。

その活動の理念としては、歌や詩や絵が作られる風景を次世代に繋ぐ持続可能なまちづくり、そしてコミュニティの復活で笑って生き、笑って死ぬる、血の通った地域社会の実現、こうした課題を、筆者を研究者として育ててくれた沖縄の「命どう宝」の精神で目指していくこと。まだ消化不良の部分もあるが、これが研究を縁に沖縄での生活を通して自然や文化、そして地域社会から学び、血肉となった筆者の社会に対する思いのエッセンスであるようだ。

そしてこれら理念の実現のためには、企業だけでも行政だけでもない、市民セクターが主体となる地域力を活かしたコミュニティスクールをはじめとする様々なコミュニティソリューションツールの確立が必要であり、さらにこれらのツールを有効に活用するためには、熟議民主主義による合意形成を行えるような市民社会の成熟が必要であろう。



(写真1) NPO青年協議会のごみ掃除ボランティアでリヤカーを引く筆者



(写真2) 越戸川再生護岸工事見学会

直近の活動としては、来年の統一地方選に向けた政治団体の立ち上げ準備のほか、熊本からごみ掃除をしながらリヤカーで日本縦断中の知人（NPO法人青年協議会：<http://seinen-kyougikai.jp/>）を手伝ったり（写真1）、都市における河川再生を軸としたまちづくりを勉強するために和光市を流れる越戸川で埼玉県が行っている再生護岸工事の見学会に参加（写真2）したりするなどして過ごしている。

また2008年の沖縄県会議員選挙から活動を始めた、環境マニフェスト市民の会（<http://ameblo.jp/manifestgo/>）に関しては、これまでの活動について「地域研究」向けの原稿を準備している。貧乏で不安定、いま流行の高学歴ワーキングプア（いまは仕事がないのでノンワーキングプアだが）そのものだが、退屈だけはしない毎日だ。

全国から広く、共に活動し、語り合える仲間を募集しているので、筆者の活動や考えに共感していただける方は是非、ご連絡いただきたい。

<連絡先>

電子メール：okuda_natsuki@yahoo.co.jp

携帯電話：080-4341-4027

第462回 沖縄大学土曜教養講座

沖縄戦は 終わらない Part4

広島・長崎・沖縄 共通の記憶継承

具志堅隆松氏

(沖縄戦遺骨収集NPO「ガマフヤー」)

高瀬毅氏

(ノンフィクションライター)

コメンテーター

岡留安則氏 (ジャーナリスト)

ビデオメッセージ

野中章弘氏

(アジアプレスインテナーショナル代表)



遺骨を調べる具志堅隆松氏



名前が刻まれた出土遺物



不発弾の磁気探査

2010年8月7日(土)

14:00~17:00

沖縄大学3号館101教室

主催 沖縄大学地域研究所(那覇市国場555)

共催 広島修道大学

長崎大学 平和・多文化センター

問い合わせ 沖縄大学地域研究所

TEL 098-832-5599 FAX 098-832-3220

那覇市食部誌での遺骨収集
撮影 保田 隆

沖縄大学

第462回沖縄大学土曜教養講座

沖縄戦は終わらない Part4
広島・長崎・沖縄 共通の記憶継承

- 【日 時】2010年8月7日（土）14:00～17:00
【場 所】沖縄大学3号館101教室
【講 師】具志堅 隆松氏（沖縄戦遺骨収集NPO「ガマフヤー」）
高瀬 毅氏（ノンフィクションライター）
【コメンテーター】岡留 安則氏（ジャーナリスト）
【ビデオメッセージ】野中 章氏（アジアプレスインターナショナル）
【主 催】沖縄大学地域研究所
【共 催】広島修道大学、長崎大学 平和・多文化センター

所内雑記

vol.11



地域貢献部門
主事 浜川 智久仁

先日、清掃員さんが70で退職。12年もの間ありがとうございました。

その清掃員さんが言っていました。「掃除をしながら毎日教室を見ているけど、寝ている学生が多いね。ほんとにもったいないと思うさ」

学生は何のために勉強をしているのだろう。就職、資格取得、学ぶこと自体の楽しさ—いろいろ勉強する理由はあると思います。それにくわえて、自分より先を生きてきた人たちに「もったいない」と言わせないために勉強する、というのもあるのではないかと、そんなことを考えさせられた、ひと言でした。

『清ら島づくり南西諸島高大連携プログラム』では、“離島カタリ場”企画を計画しています。これは、大学生と離島の高校生の交流の場を設定するものです。高校生にとって大学生は、高校生活を終えて間もない先輩です。そのような先輩の、身近な経験談、大切にしている価値観を聞くことで、高校生に行動を起こすための何かを感じてもらいたいです。

以下、大学生の“離島カタリ場”メンバーによる紹介文をUPします。

離島カタリ場とは、離島の高校生にとってナナメの関係であるカタリ場キャスト（大学生）が高校教員と連携を取りながら、高等学校の授業枠にキャストと高校生が「語る場」を提供する団体です。

2008年に結成されたNPOカタヤビラ（代表：金城円）の支部として設立され、現在沖縄大学の学生を中心に活動しています。

そして今回は、離島に焦点を当て考えたいと思います。

沖縄の離島には大学がありません。そのため、大学に進学した20歳前後の若者が島にいないという現状があります。大学を含め、高校卒業後の将来が遠い存在であることが不安としてつっていけらるうと考えます。

カタリ場で大学生と出会い、共に話すことを一つのきっかけに紙面上だけだった情報が、生の情報となり近い存在としての将来の情報として自分のやりたいことへの第一歩を踏み出せるようになるのではないのでしょうか。そんなきっかけ作りの手助けを離島カタ

り場がやっていきたいと思います。
大学生と高校生とが出会い、語る場。
その中から高校生が夢を見つける「きっかけ」が生まれると考えています。



◆今後の活動日程

- 8月 結成式
- 9月 運営資金造成のための営業
- 10月 //
- 11月 離島カタリ場パンフレット作成
- 12月 企画の準備
- 1月 //
- 2月 宮古総合実業高校企画

◆NPOカタヤビラホームページ

<http://www.katayabira.net/about/index.html>

◆連絡先

代表：波平 雄翔(沖縄大学人文学部
こども文化学科3年)

PC : p08560@okinawa-u.ac.jp

高大連携GP担当
下地 克人

離島研究・実践促進プロジェクトの
関連で多良間島に行ってきました。
ああ° がんいやあ かぎずうまやあー
ばあゆうっ° ~

多良間小学校1、2、3年生食育授業

を見学しました。子ども達は先生の問いにほとんどがハイと手を挙げとても元気よく印象的で都心部の子ども達には見られない光景です。

子ども達の顔ぶれを見ると日本人離れた面持ちで名札を見てみると姓は沖縄名字ですが名前が外国風です。これは過疎における離島問題の一つである嫁不足に起因しています。

島に住む若者は東南アジア(主に中国、韓国、フィリピン等)からお嫁さんをいただいています。

過疎の離島で国際化が進んでいました。島で生まれた子供達はハーフになるのですが、幼い頃から人種、国籍など関係なく接して生活している子ども達を見て、島の子ども達が大きく成長し島を離れて生活していても、人種や国籍など関係なくつきあっていける世界中の平和を実現する一役を担う人になって欲しいと、島の子ども達なら出来ると未来を感じました。



戦略連携GP担当
寺井 敦子

沖縄大学と「まちづくりリスト」育成プログラムに関わるようになって、約1年になります。夏の暑さの記憶の中で、耳慣れない用語にすこし戸惑ったこと、それをねじふせてでもこの仕事に関わってみようとしたことを振り返って、多少肩に力が入っていたかもしれないと思います。学生や、他の人にはじめて説明するときにも、このちょっとしたわかりにくさを自覚しながら、一人よがりではない熱さをもって伝えられたら、と改めて思っています。共感の輪をつないでいきたいものです。

戦略連携GP担当
稲垣 暁

私が手がけるまちづくり実習のうち、中核部隊である「マチグワー班」のプログラムがようやくカタチを成した。7月末から本格的に実習をスタートさせている。「中学生meets マチグワー」「安全安心のマチグワーづくり」「NP0中間支援」「子育てママの社会起業エッグデリ」「市民大学ファシリテート」の5つのメニューはそれぞれ「地域コーディネート&コミュニケーション」「住民自治による防災」「地域活動支援」「コミュニティビジネス」「リーダーシップ」というテーマに対応している。マチグワーや周辺地域、NPOの協力で地域づくりのさまざまなシーンを実習に取りこむことができた。

この実習がインターンと異なることは、学生がお客様ではなく、サービス

の主体であること。大学で学んだことを地域にソーシャルサービスとして提供し、その見返りにソーシャルラーニングとして学びの場を提供してもらうことだ。実習だからといってまちづくり会社やコンサルなどに預けると、企業目線による成功体験だけを学んできたり、営利としてのまちづくりをおぼえてしまう。学生のスケジュールやニーズを調整し、何よりまちのニーズを最大限に尊重しながらプログラムを組むことは非常に大変だ。しかも、まちは生き物だ。まちの動きやニーズに沿ってプログラムも変化する。それでもこのプログラムが必要だと考えるのは、つねに住民目線や当事者視線を持ちながらリーダーシップを発揮できる沖縄人が次の時代には必要だからだ。

毎回の実習後には1時間かけてみっちりふりかえりを行い、その日の経験を次の作業プランにどう生かすか発表させている。阪神淡路大震災以降、被災住民として地域復興に関わった経験と記憶がそうさせている。地域復興に関わる過程で、ボランティアやコーディネーターは「マッチ」と「風」であるべきことを学んだ。他所からボランティアとして入ってきて、住民よりも主役になって失敗していく事例をいくつも見た。主役は地域住民であり、他所からのボランティアやコーディネーターは「風の人」であるべきだ。我々の仕事は、キャンプファイヤーの火種を起こすことと、風を送りこんで燃え上がらせること。学生たちは、いったん心に火がつくと大きく燃え上がる。食い付いてくる。地域住民もどんどん意欲やアイデアを出す。私たちは時に熱い心で彼らをひっぱり、時に後方からうちわであおいで涼しい風を送る。

そして、学生や住民が自立したら、風のように去る。それが私たちソーシャルワーカーの使命なのだ。

事務
小林 己記

夏休みの季節ですね。夏の休暇を満喫しようと色々なプランを立てている方も多いと思います。

私は、近場で沖縄県立博物館・美術館へエジプトのミイラを、沖縄こどもの国へ夜の動物を見に行く予定です。頭の中では、「休み→いつもとは違う場所へ→驚き・感動」の図式がすでに出来上がっており、古代ミイラやライオン達との出会いを前に仕事の集中力が落ちていきます。夏バテでなく、夏の楽しみのために業務の効率が低下しているこの頃です。



事務
仲宗根 礼子

「断捨離（だんしゃり）」

生活をより便利にしてくれるはずの様々なモノ。ふと気付けば、そのモノに逆に振り回されている現代人。お客

様に使うのでとりあえず、いただき物なのでとりあえず、いつか着るのでとりあえず、時間ができたら読むのでとりあえず・・・お客様には上等のカップでおもてなし、自分はポイントを貯めてもらったマグカップ。趣味に合わないけど、あの人の気持ちがこもった贈り物なので感謝の気持ちと共に箱に入れて封印。去年の服はもうはいらない、一ヶ月経てば関心事は他へ移り読んだのは結局立ち読みした目次部分だけ。思い当たるところか、これ私の日記？ってな感じですね^^

本当に使うモノを使う分だけ身の回りにおいて、それらを大事に、生活してみよう。これまで必要以上に肩にのっていた執着や思い込みがすっきりそぎ落とされること間違いなし！モノだけでなく人間関係もね！もう読んだだけでも何^もか落ちた気がします。

この断捨離という言葉、掃除の時に何気なく唱えて（？）みると、アラ不思議。思いのほか片付くんです！ホントに。ちなみに実践している人をダンシャリアンというのだそうで、広い場所を掃除する際にはフランス風がおススメ。Je suis Danshalia～♪で、振り付きだとベターですね。引き出しの中とか細々したものを整理するときは大だんしゃ～り～だんしゃ～り～だんしゃ～り～♪とお経風に唱えるとよいような気がします。ぜひ試してみてくださいね！